

鼻高

ハイキングコースを歩く。



距離：約 1500 m
 所要時間：約 40分
 植物お楽しみレベル



歴史お楽しみレベル



ハイキングレベル



(岩場や尾根筋が多い)

登山道入り口：

頂上または、大参道・大釜から

金華山の北東を尾根づたいに頂上に登る登山道。尾根の上を歩くため、ほとんど起伏もなく緩やかです。水風呂谷付近では、岩盤が露出し両側が切り立った岩などがあり、植物はツブラジイやアラカシ、後ミツバツツジなど多く見られます。

COURSE GUIDE

鼻高ハイキングコースの植物 ①



鼻高ハイキングコースでは、アカマツ - モチツツジの群落を見ることができます。これは以前、自然林を薪や炭などに利用した後の2次林だといわれています。金華山は、手付かずの自然だけではなく、人の生活に必要な材(薪や炭など)を切り出す里山として活用されていたことがわかります。

ミツバツツジの群生 ②



大参道との接続部からビューポイントまでの間では、4月末ごろになるとたくさんのミツバツツジの花を見ることができます。ミツバツツジの花は紅紫色の花で、花が終わると3葉ずつ揃った葉がでるので「ミツバ」の名がついたといわれています。

カゴノキ ③



金華山では、珍しいカゴノキが鼻高ハイキングコースの長良川沿いで見ることができます。カゴノキの樹皮は、写真のように鹿の子(かの子)の体にある模様似ていることから、この名前がついたといわれています。

鼻高からの眺望～金華山と鶺鴒の関係～④



鼻高ハイキングコースの途中の岩場に架かるハシゴを登ると眼下に清流・長良川を望める絶景ポイントがあります。この長良川で行われる鶺鴒と金華山の関係は非常に深く、明治時代には金華山の松の枯損木を鶺鴒の篝火用の材として供給されたという記録が残っています。

絶壁にあるヒトツバ ⑤



鼻高ハイキングコース頂上に向かうと最後に見上げるほどの絶壁を登ります。この岩場では、ヒトツバなどの乾いた所でも成長できる植物が生えています。ヒトツバは乾いたところでは葉を丸め水の蒸発を防ぎ、湿っているところでは葉を広げています。

ゴジラ岩 ⑥



めい想の小径との接続部から少しめい想側に下った所にゴジラの形に似た岩が見られます。金華山には、ゴジラ岩のほかにもカエル岩など新しい名所が生まれています。岩の形を注意深く観察しながら登ってみるのも岩山である金華山の楽しみ方の1つです。

くわしくは裏面へ

鼻高ハイキングコースの植物の移り変わり



鼻高ハイキングコースは、金華山の北東を尾根づたいに頂上に登る登山道です。鼻高ハイキングコースは、金華山の南側斜を横断するた尾根の上を歩くため、登山道周辺は乾燥し明るい登山道です。達目方面から登ると尾根筋を歩くのでほとんど起伏もなく緩やかですが、頂上近くになると急な岩場が続きます。

達目方面からは登るとミツバツツジの群生やアカマツといった、かつて里山として活用されていた痕跡を感じることができます。また、金華山では珍しいカゴノキの群生地があり、花などを楽めることで人気のあるコースです。また、頂上付近の岩場では、ヒトツバなどの岩場に生息する植物も観察することができます。

アカマツモチツツジは、里山の痕跡？

アカマツとモチツツジは、森を切り開き光が差すところへ入り込む代表的な種として知られています。そのため現在アカマツやモチツツジの自生する所は、自然林を人が薪や炭などの材として使うために切り開いた後だということができるのです。

金華山は、人の手が入っていない森が広がっていると山だと知られていますが、金華山ではこのように人が生活するために薪や炭などに活用するために木を切った場所が所々確認されています。



長良川は3つに分かれていた？

鼻高ハイキングコースの眼下に見られる長良川は、かつては金華山にぶつかり3つに分かれていました。それが古川・古々川・井川です。現在でもめい想の小径からはその古川・古々川が流れていた痕跡を見つける事ができます。古川は、現在の長良川国際会議場付近から西に流れ、そして古々川は鷺山の南側を流れていたといわれています。昭和初期の治水工事により井川が現在の長良川となりました。また現在、古川・古々川の跡地は国際会議場やメモリアルセンター、学校などの公共施設や住宅地となっています。

ヒトツバの変種？

金華山の岩場でよく見かけるヒトツバですが、良く見ると葉先が割れているものを見つけられます。これは、シシヒトツバと呼ばれるヒトツバの変種です。変種とは、基本的にはヒトツバと同類ですが、葉の形が変わっているということです。どのヒトツバも同じように岩場にくっついていますが、よく観察してみるとシシヒトツバを見つけられます。

